

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾 ニュース

「みんなで語り合う人権学習(全体学習)」を経験した教え子への追跡調査について。

吉成先生へ

先日はお電話をいただきありがとうございました。中学生のときの全体学習についての意見をお送りする件で、返事が遅くなって申しわけございませんでした。以下の文章で「おへんじ」とさせていただきます。よろしく申し上げます。

ちなみに私は現在、〇〇県の市役所で、障がいを持つ方のケースワーカーとして日々働いております。役所勤めは10年目で、地元を離れてすでに16年になります。先生も大学院に戻られているとのこと、ますますのご活躍をお祈りしております☆

読み始めて、「やっぱり人とかかわる仕事に就いてるんだ」と、感慨を深くしました。「人権学習をしていけば、人とかかわる仕事に就く人材が多くなる」 私なりの感触です。そんな前置きをしたうえで、当時の話に入っていました。

Q. 中学生当時、「全体学習」をどう感じていたか？

中学生の頃に行った「全体学習」について思い返すと、色々と一所懸命に自分や周りの仲間のことについて考えていたと思います。

全体学習のきっかけというのは、同和問題についての理解を深め、差別解消に向けて取り組んでいく、というのが主な出発点だったと記憶していますが、話し合いはそれにとどまらず、クラスメイトの個別の問題や、進路の問題など、具体的なところまで及び、ときには自分も熱く思いを語っていたなあと思います。

同和問題自体が、中学生にとっては分かりにくいものであったし、子どもながらになんとなく口に出しにくいという雰囲気があり、全体学習の時間がいやだなと思ったことも多分あったと思います。

しかし、今思い返せば、そういう時間があってよかったなあと感じています。なぜならば、全体学習の場では、自分のことをオープンに話せて、それをみんなが受け入れられるという体制が整っていたからです。そういう場所がなければ、私は未だに、同和地区の人に対して「触れてはいけない」気持ちを持っていたかもしれませんし、その人がもつ心の悩みに対して全く理解できなかったかもしれないからです。同和問題は目に見えないからこそ、その人の内に持っている問題が分かりにくく、解決も難しいのだと思います。

自分のことがオープンに話せて、それをみんなが受け入れられる体制。そんな体制ができていたかどうか。それは本当は、当時の一人一人に訊かねばなりません。でも、語り手がそう感じていたのですから、それは間違いなくそうなのだと思います。

また、「なんとなく口に出しにくい」という感覚は、子どもであっても感じているということ。そのまま大人になっていけば……と思うと、空恐ろしい感覚になります。しかし、そんな学びがないということは、そんな現実が毎年のように再生産されているということなのかもしれません。「みんなで語り合う人権学習」の必要性を痛切に感じます。

そして、「そういう時間があってよかった」と彼女が思うには、彼女なりの「その後」があったようです。(次号につづく)

みんなで語り合う人権学習は、——「すべてを変える」

うずしおランチ共同代表 吉成 正士